

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機とした大学と 地方公共団体における連携事業の成果と課題 ーパラリンピック・ムーブメントに着目したトークイベントを事例としてー

Results and issues of collaborative projects between universities and local governments that touch of the Tokyo 2020 Olympic and Paralympic Games. ー A case study of a Talk event focusing on Paralympic movement ー

田口康之*, 青柳秀幸**, 田原淳子*

Yasuyuki TAGUCHI, Hideyuki AOYAGI and Junko TAHARA

I. 研究の背景

2013年9月7日、第125次国際オリンピック委員会総会において、第32回オリンピック競技大会(2020/東京)及び東京2020パラリンピック競技大会(以下、「東京2020大会」と略す)の開催が決定した。それ以降、日本では、同大会の開催を契機に様々な取組やイベントが開催されている。東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会(以下、「大会組織委員会」と略す)は、東京2020大会参画プログラム^{注1)}に延べ134,818,201名が参加したことを報告しており(2021年2月15日現在)⁵⁾、その数は増加している。東京2020大会は新型コロナウイルスの影響を受けて開催延期となっているが、このような状況下において体育・スポーツを専門とする大学や専門知識を有する者は、東京2020大会を契機に如何にしてその役割を担うことができるのだろうか^{注2)}。

II. 先行研究の検討及び研究の目的

増本らは、東京2020大会の招致が成功した2013年以降、“オリンピック”をキーワードとしたイベント・シンポジウムの開催に関する学術情報が増加傾向にあることを「CiNii Articles」の検索調査から明らかにしている。そして、その調査結果に基づき、「体育・スポーツ系大学と地方公共団体との東京2020大会に関する連携事業についての学術情報は管見の限り見られない」と指摘した。さらには、先述の東京2020大会参画プログラムの実績紹介にも体育・スポーツ系大学と地方公共団体によるプログラムがほとんど見られず、概要紹介のみに留まっていたことを指摘している。増本らは、そうした背景のもと、国土館大学と東京都多摩市が大会組織委員会公認プログラムとして主催したイベント(トークショー及び特別展)を対象に、その成果と課題を報告している²⁾。

* 国土館大学体育学部 (Faculty of Physical Education, Kokushikan University)

** 国土館大学大学院スポーツ・システム研究科 (Graduate School of Sport System, Kokushikan University)

その後、学校法人国士館と多摩市は、上述の研究を踏まえ、「～東京2020パラリンピック開催まであと1年！～ トークイベント in TAMA “夢への挑戦” パラリンピアンから学ぶ、限界への跳躍」(以下、「トークイベント」と略す)(2019年9月29日(日)、於多摩市立関戸公民館ヴィータホール)を開催した。このような活動は、東京2020大会の開催の有無にかかわらず、オリンピック・パラリンピックや体育・スポーツに関する知識を一般に普及していく上での重要なツールになると考えられる。また、その活動の継続的な記録、公表は、東京2020大会以降にも多様な組織・団体がスポーツを題材に連携、協働していく上で有益な知見になり得ると考えられる。

以上のことから、研究と実践を往還した体育・スポーツ系大学による活動の継続的な記録、公表は、イベント内容及び参加者の満足度の発展、向上を図るために有効であり、社会的な意義を有していると考えられる。そこで本研究では、国士館大学と多摩市が大会組織委員会公認プログラムとして主催した上述のトークイベントを対象に、その成果と課題を明らかにすることを目的とした。

Ⅲ. 研究の対象及び方法

本研究は、次の手順で行った。

- (1) トークイベントの開催経緯や目的、内容を整理した。
- (2) トークイベント参加者に実施したアンケート調査の結果を分析した【表1】。

なお、各設問における未記入の回答は分析対

象から除外した。また、分析結果は百分率(%)で表し、小数点第2位以下を四捨五入して算出した。従って、合計が100%を上下する場合は、結果の傾向を左右しない微細な端数調整を行った。

- (3) トークイベントの目的ごとに、その成果と課題を考察した。

Ⅳ. トークイベントの開催の経緯及び目的

東京都多摩市に体育学部が所在し、地域社会への貢献を図る学校法人国士館は、開かれた地域社会を志向する多摩市と2003(平成15)年に基本協定を締結し、互いに連携して事業を進めてきた。そして、2016(平成28)年11月24日には、東京2020大会に向けた一層の連携強化を図る目的で、新たに「多摩市と国士館大学との東京2020オリンピック・パラリンピックに向けた取組に関する連携協定」を締結した。その主たる連携及び協力内容は、多摩市在住の幅広い世代を対象とした、①オリンピック・パラリンピック・ムーブメントの推進及びオリンピック・パラリンピックレガシーの継承、②東京オリンピック・パラリンピックを契機とした健康づくり活動での連携、③東京オリンピック・パラリンピックに関わる教育的分野での連携¹⁾⁴⁾である。協定に基づく取組や事業は、主に国士館大学体育学部及び東京オリンピック・パラリンピック支援課と、多摩市オリンピック・パラリンピック推進室との連携によって企画、運営、実施された。

国士館大学と多摩市はイベントを企画するにあ

表1 アンケート調査：実施方法

実施日時	配布・回収方法	対象者・対象者数	回収枚数	回収率
2019年9月29日	入場時に全参加者へ配布し、退場時に回収した。 なお、記入・回答は任意とした。	151名	67枚	44.4%

たり、これまでの主な取組が上述の②に資する内容であったこと、また、オリンピックと同様にパラリンピックにも積極的に焦点を当てていく必要性について共通認識を図った。そして、次の4つを目的とし、トークイベントを開催した。1) 幅広い世代に対する東京2020大会に向けた気運醸成 2) 「障がい者がスポーツを楽しめる環境づくり」を多摩市内において促進するための一助となるようにすること 3) 障がい者や障がい者スポーツ、パラリンピック・ムーブメントに関する参加者の認識の深化 4) 自らの生き方に関する参加者の認識の深化

V. トークイベントの内容

トークイベントは2部構成（第1部 講演、第2部 クロストーク）で開催し、当日は、151名が参加した。

第1部の講演の前に、パラリンピック・ムーブメントへの導入として、本トークイベントの実務を担当した青柳秀幸氏（国士舘大学大学院博士課程在籍）が「パラリンピックの理念と歴史」と題して説明を行った。

第1部のゲストには、山本篤氏を招聘した。山本氏は、2008年北京・2012年ロンドン・2016年リオ夏季オリンピック競技大会への3大会に連続

出場し、北京大会では走り幅跳び銀メダル獲得、リオ大会では走り幅跳び銀メダル・4×100mリレー銅メダルを獲得し、当時（2016年5月）の世界記録更新といった輝かしい成績をもつ世界のトップアスリートである。

第2部のゲストには、数多くの全国レベルの大会で入賞・活躍した松山和真氏及び本間未来氏の2名（いずれも国士舘大学体操競技部に所属）を招聘した。イベントプログラム及びゲストのプロフィールは、別紙（チラシ）を参照されたい。

実際に展開されたトークの概要は、【表2】の通りである。

VI. トークイベントに関するアンケート調査結果及びその分析

1. 参加者の属性

参加者は、女性の割合が男性に比べて多く、56.1%を占めた【図1】。

年代別では、参加者全体の44.8%を10～20代が占め、52.2%を40代～70代が占めた【図2】。

このことから、本トークイベントは、若年者層または高齢者層のどちらか一方に客層が偏ることなく、幅広い世代からの参加を得ることができた。30代の参加の少なさは、子育て世代の外出が難しいと言われていること⁷⁾と関係しているものと

(N = 66)

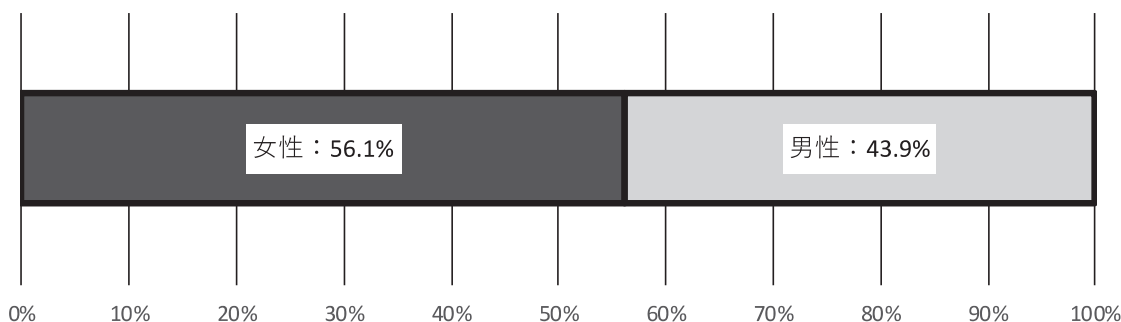


図1 参加者の性別比

表2 トークの概要

トークの概要		
導入	青柳氏	<p>○2019年3月に実施したトークイベントにおいて実施したアンケート調査より得られた、多摩市民のパラリンピックに対するイメージの紹介</p> <p>○パラリンピックのシンボルに込められた意味</p> <p>○パラリンピックの起源やルートヴィヒ・グットマン医師が遺した言葉</p> <p>○パラリンピック競技大会の閉会式などでは、前向きなメッセージが発信されていること</p> <p>○パラリンピックが、インクルーシブ（包括的）な社会（障がいがある人もない人も、みんなが助け合って、一緒に生活できる社会）の創出を目指していること</p> <p>○東京2020大会を契機に、日本における学校教育現場においても「勇気」「強い意志」「インスピレーション」「公平」「インクルージョン」といった価値などを伝えるオリンピック・パラリンピック教育が始まっていること</p>
	C	<p>○オリンピック・パラリンピックはメダル、競技、アスリートに関心が向きがちであるが、今回お話をいただいた本来のパラリンピックが目指していること（理念）を頭の隅や心に留めていただけたらありがたい</p> <p>○2020年に向けて、2020年をきっかけに、私たちはどのように過ごすことができるのか、また、どのように過ごしていくかを問いかけた</p>
第1部	田口氏	<p>C ○本トークイベントをきっかけに、多摩市民及び国士舘大学の学生みなさんに気持ちを新たにスポーツに対して色々な意味で関心を持ってもらいたい。そして、自らの生き方やこれからの過ごし方をオリンピック・パラリンピックを契機に考え直してくれたら、また、東京2020大会を身近に感じてもらったら嬉しい。そのようなことで今回のイベントを開催しました</p>
	山本氏	<p>○世の中がオープンマインドになっていくように、日頃から意識、行動していること →義足を色々な人知ってもらいたいため、義足を隠さずに生活していること</p> <p>○現在の活動状況、生活環境について →スノーボードやゴルフにも親しんでいること →オリンピックアスリート、パラリンピックアスリート関係なく同じように刺激し合える環境で陸上競技をしていること</p> <p>○足の切断を契機とした、生き方（気持ちや意識）の変化 →「自分自身が何をしたいのか」「楽しいことや、やりたいこと」をよく考えた →スノーボードをすることを目標にリハビリなどを重ねた →人間は「できること」と「できないこと」に脳がリミットをかけていると思う。「もっとやればできる」というイメージがあったから、その後何度も何度も雪山に行ってトレーニングをして平昌パラリンピックに出場できるところまでいった →「どうやったらできるのか」を考え、着目して行動するようになった</p> <p>○陸上競技との出会い →「義足」にかっこよさを感じ、これを使って早く走れるようになれば僕もかっこよくなれるかなという思いで陸上をスタートした →最初の頃は何度も何度も転んだが、徐々に速くなっていった。その後、パラパラリンピックに出場したい、そこでメダルを獲りたいという気持ちに変化した →いったこと</p> <p>○リオパラリンピックでのパフォーマンスと経験について →4×100mリレーの様子と3位入賞への経緯、走り幅跳びの様子と2位入賞の経緯 →リオパラリンピックまでの歩み</p> <p>○今現在の東京2020大会への思いについて →今は金メダルの気持ちはあまりない。金メダルは他人との勝負。自分自身がコントロールできないところにある →自分自身がコントロールできるところに着目し、何ができるのかと考え、パラリンピックの日に最高のパフォーマンスができるように準備する。 そして、最高の記録をすることが全てではないかと考え、行動している →金メダルを獲ることも大切であるが、僕自身ができることは、最高のパフォーマンスをその日に出し、自己ベストを更新できるような跳躍をすること。自身の最高のパフォーマンスをし、その結果メダルを取ることが東京でできたらと思っている →37歳になるが自分の限界が見えていない。僕自身も楽しみにしている</p> <p>○パラリンピック競技大会における障がい者への工夫 →パラリンピックのメダルには、音や点字で障がい者に配慮した工夫がされている</p> <p>○パラリンピック競技大会と大会後への期待、思い →パラリンピックが来たことで報道され、パラリンピックが認知されて日本は大きく変わった →今後はパラリンピックで何を遺せるかが大切だと思う</p> <p>○山本選手の思い →一人との繋がりや自身の人生を豊かにしてくれた。そういつか必然になる世の中にしたいと思っている →生活用の義足は国の法律により多少の支払いで支給してもらえるが、競技用義足は支給してもらえない。海外のアスリートと一緒にランニングクリニックも開催しているが、どんな人でも走れるようになるため、走れることのメッセージを伝えたい →これまでできなかったことができるようになると、違うことにもチャレンジしたくなると思う。色々なことにチャレンジすることによって、人々の人生が豊かに、楽しくなると思う →僕自身、チャレンジをすることが人生で楽しい。自分の限界がどこにあるのかを探したり、「自分って何ができるんだろう」と挑戦している。 人間誰しも、今までできなかったことができるようになることに喜びを感じると思う。そういう体験を2020以降も継続的に増やし、全国的に拡げていけたらと思っている。こういったことが実現すると、みんながハッピーになれるのではないかと考えている →活発な障がい者が増えれば、働くことや納税もでき、そうすれば社会も回っていいのではないかと →僕が活躍することが一つのツールになると思っている。準備をしている →限界だと思えるところまでやりたいと思っている。もう無理だな、限界だと思ったことが限界だと思っている。その時が来たら、次の道へ進んでいきたいと思っている →学生もいる中で思うことは、自分の中で勝手に自分の限界を決めていることが多いのではないかと →スポーツをやっている以上、「こんなもんじゃない」常に思いながら、本当に自分が正しいトレーニングをしているのか自分をよく知って、もっと競技力を伸ばせるんじゃないかと考えながら進んでほしい →パラリンピックをよく知って、こんな人がいたよと伝えてもらいたい</p>

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機とした大学と地方公共団体に おける連携事業の成果と課題 — 1 -
 パラリンピック・ムーブメントに着目したトークイベントを事例として—

第2部	松山氏 本間氏	B	○プロフィール及び大会等での演技、活躍の紹介
	松山氏	C	○山本選手の講演に関する感想など →多くの共通点があった。特に、人との繋がりが人生を豊かにできるという点に共感させてもらった →体操競技部の仲間や同期、またそれを通じた人々に助けをもらおうと同時に、たくさんの出会いがあった →大変なことや不便があるのだけれど、不幸ではない。たくさんの人々との繋がりがあから、楽しく生活できているし、生きている ○現在は、多摩市の総合体育館でアーチェリーに取り組んでいる
	山本氏	C	○松山さんへの感想 →重要な仕事に就いて活躍していることが素晴らしい。会社や社会の少しの配慮で、障がい者も活動・活躍できる →人との豊かな関係を構築したり、前を向いて上を目指して行動していることが素晴らしい →海外はバリアフリーが浸透しておらず、バリアだらけ。しかし、周りの人々が自然に、普通に助け合っている。日本もそのようになってほしい。障がいによって、できること・できないことは異なる。だからこそ、まずは声がかがが大切。日本人にはシャイな部分があるので、パラリンピックを通じて海外のオープンマインドを知ってほしい。そうした海外の文化を東京2020大会以降に遺せるのではないかな
	本間氏	C	○山本選手の講演に関する感想など →何か一つのことができるようになり、他のこともできるんじゃないかと感じることや、その発想は、障がいの種類が異なっても同じだと思った →何かできるように工夫する姿勢に共感できた →山本選手・松山さんと同じく、人との繋がりの大切さに共感した。怪我をしてよかったとは思わないが、怪我をしたからこそ出会えた人たちがいる。そこには何からの意味があると思う。これからも、そうしたご縁を大切にしながら学生生活を歩んでいきたい
	山本氏	C	○本間さんへの感想 →僕も本間さんと同じで、怪我をしたからこそ知ったこと、進もうと思った道、考えた道がある。世界が広がった →怪我をして、自身のことに向き合ったり、今後したいことを考える時間が増えたと思う。まだ若い学生なのとそれらが確立していて素晴らしいし、可能性を感じた
	田口氏	D	○障がいのある方に声をかけた気持ちはあるが、声をかけないでほしい、自分でできると思っている人もいるのではないかな。どうしたら良いですか？
	山本氏	B	○田口教授への回答 →性格の問題や、障がいの種類・程度が違うので難しいと思う。しかし、まずは「聞くこと」が大切だと思う。その後、共通理解・認識を図れば良いと思う。暗黙のままで成り立つことはないと思うので、声に出すことが必要だと思う。コミュニケーションが大切
	田口氏	D	○限界を決めずにこれからも前を進んでいきたいと思っている松山さん・本間さんにとってスポーツとは？
	松山氏 本間氏 山本氏	B C	○松山さんによる田口教授への回答 →スポーツは人生の中で一番大きなもの。体操は、いかに難しいことを簡単に魅せられるかだと思う。今の人生とも似ていると思う など ○本間さんによる田口教授への回答 →スポーツは気分転換、リフレッシュになるし、人との出会いを生んでくれるもの →ウェルフェアラグビーは、障がいの程度に関わらずそれぞれに役割が与えられ、身体に拘らず頭も使う部分にも魅力があるのではないだろうか ○山本選手による田口教授への回答 →スポーツは僕の生きがい。陸上を中心に自身の世界や行動が広がっていた。自身の役割も変化していった
	松山氏 本間氏 山本氏 & プロア	A B C	○障がい、事故からの落ち込みやショックからどのように立ち直れたのか。またどれくらい時間がかかったのか？ →山本選手：1日です。1日涙が乾くまで大泣きした日がありました。最終的にスポーツをしたいという答えになった。 ○パラリンピック選手によるオリンピックへの参加が議論された際、義肢・義足が有利になっているのではないかと聞かれました。山本選手の考えるフェアとはどういうことでしょうか？ →山本選手：すごく難しい問題ですね。義足の踏切時のデータだけ見れば、人間の足と義足の違いで有利になっていることがある。一方で、義足は早く走ることができない。1つの局面を見ることが良いのか悪いのか難しいところ。僕がマルクス・レームのように跳べたら、僕もオリンピックに出たいと思う。レベルの高い、世界一を決める所で争いたい、競技をしたい。そういうアスリートとしての心情がある。 ○なぜそこまで上を目指せるのですか？ →山本選手：全ては、楽しいからです。周りの人も喜んでくれるから幸運。自分も楽しいし、苦しいと思っていたら辞めたくなくと思う。僕自身の根底にあるのは、人生の生き方としてだと思うのですが、やらなきゃいけないことをやるのではなく、やりたいことを100パーセントやれる状況をつくりたい。でも人生の中では、やらなきゃいけないことは結構たくさんあると思う。それを僕は今、ちょっとずつ減らしている状況です。自分の気持ちに正直に生きていきたい。その方向性が間違っていなければ、たくさんの方が応援してくれるのかなと思います。 →松山さん：怪我して身体が動かなくなり大変な部分があったが、リハビリをする中で動かせる部分が増え、楽しかった。これは、スポーツと同じだと思った。できないことができるようになり、できることが増えるのはこの上なく嬉しいことだった。それが前を向くことに繋がったのではないかなと思う。 →本間さん：頸椎損傷は数ミリずれていたら命を落としていてもおかしくない怪我であるが、そのような中で生き延びたことが他に変えられないくらいに幸せなことだった。これから先何をやってもこれ以上落ちることはないだろうと思った。だから色々チャレンジして、色々なことに挑戦していきたいなと思えたのが、前を向けるようになったきっかけだったのではないかなと思う
	まとめ	A C	今回のトークイベントのテーマの中に「限界への挑戦」というワードがあります。「限界」はあるのかな？と考えましたが、今回のお話では、「限界はない」ということだと思います。それぞれが色々なことに取り組んでいって、それがある程度できなくなった時には、山本選手のお話にあったように違う人生や違う生き方、自分自身の異なる能力を求めて新たな方向に進んでいければ良いのではないかなと思います。パラリンピックに焦点を当てながら本日のイベントを進めてきましたが、ご登壇者それぞれの生き方を聞いて、我々全員がこれから前向きに、それぞれの「無い限界」または自分で作る限界を乗り越えて、さらなる飛躍をしていけたらと思います。この度はありがとうございました。
		A	山本選手からは、社会の仕組み作りというお話もありました。 東京2020大会の開催決定以降、レガシーや、オリンピック・パラリンピックムーブメントといった言葉が知られてくるようになりました。「する」だけのスポーツではなく、「見る」「支える」スポーツがあったりと、色々な観点からスポーツに携わるような世の中がやってきました。何事においても、きっかけが大事だと思います。みなさまも今回をきっかけに、おもてなしの心を持って、たくさんの方をサポートしてもらえたらと思います。

凡例

A：パラリンピック・ムーブメントに関連した事例

B：登壇者の経験・体験

C：登壇者の思い・期待など

D：その他

思われる。

一」であり、29.9%を占めた【図3】。

2. 広報活動の種類と有効性

本トークイベントを知った媒体として最も多かったのは「友人や知人等から聞いた」であり、32.8%を占めた。その次に多かったのは「ポスタ

3. トークイベントに参加した理由

本トークイベントに参加した理由として最も多かったのは、「ゲストアスリートに興味があった」であり、62.1%を占めた。その次に多かったのは、

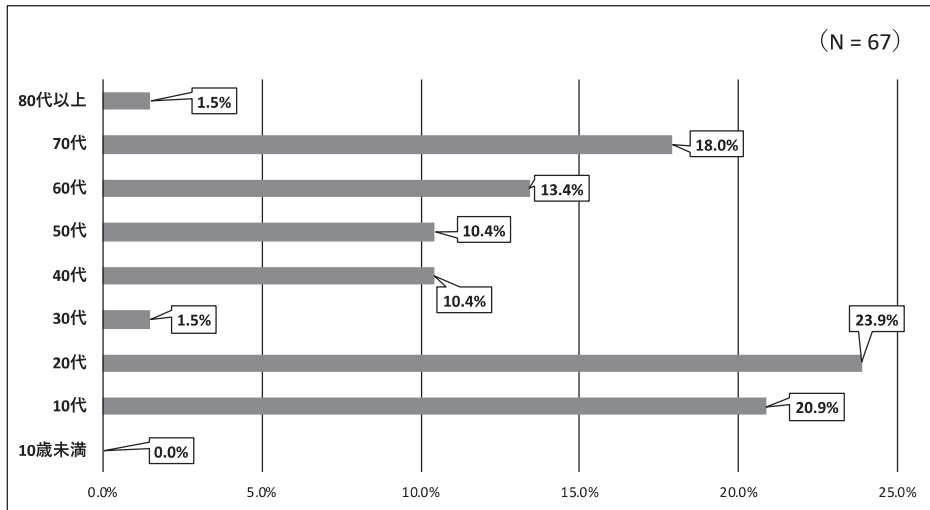
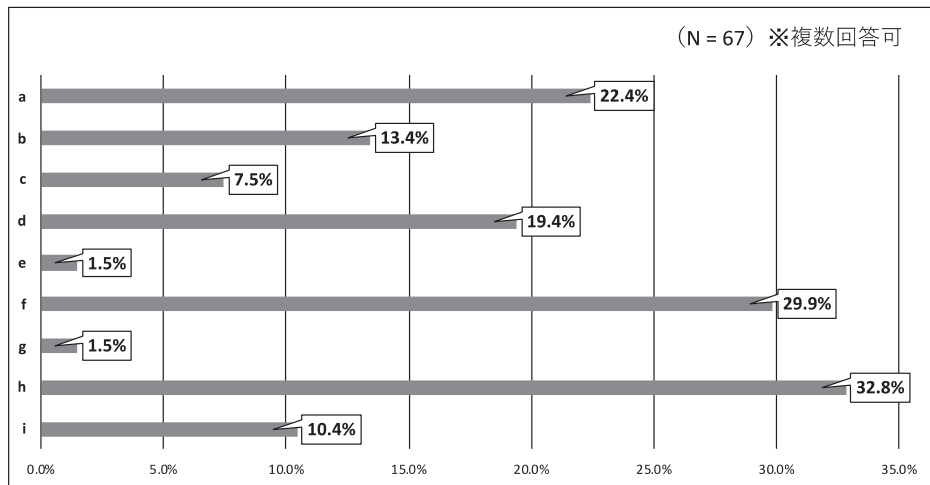


図2 参加者の年齢層



凡例

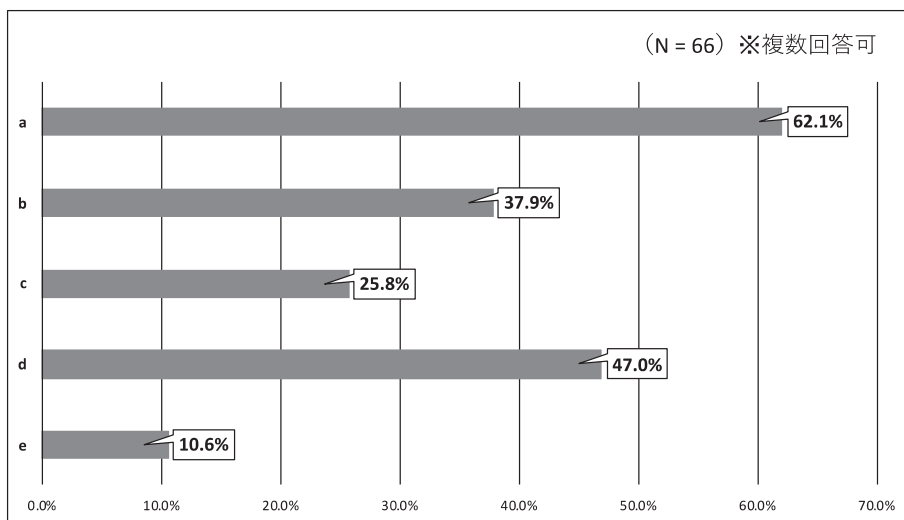
- a: たま広報 b: 多摩市公式ホームページ c: 回覧板チラシ d: 公共施設の置きチラシ
- e: タウン紙 (ミニコミ紙) f: ポスター g: インターネット h: 友人や知人等から聞いた i: その他

図3 広報活動の種類と有効性

「パラリンピックに興味があった」(47.0%) であ
 った【図4】。

4. トークイベントに対する満足度

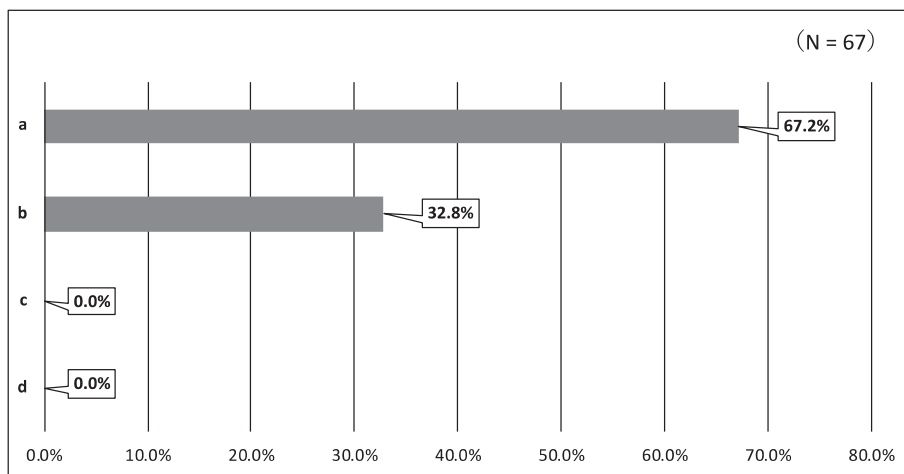
本トークイベントに対する満足度として最も多
 かったのは、「大変満足できた」であり、67.2%
 を占めた。「満足できた」とする回答(32.8%)と
 合わせると、100%を占めた【図5】。



凡例

- a: ゲストアスリートに興味があった b: スポーツに興味があった c: オリンピックに興味があった
 d: パラリンピックに興味があった e: その他

図4 トークイベントに参加した理由



凡例

- a: 大変満足できた b: 満足できた c: どちらとも言えない d: あまり満足できなかった

図5 トークイベントに対する満足度

5. トークイベントに参加した後のパラリンピックに関する理解度の変化

トークイベントに参加した後のパラリンピックに関する理解の変化について尋ねたところ、最も多かったのは、理解が「大いに深まった」であり、55.2%を占めた。「深まった」(44.8%)と合わせると、100%を占めた【図6】。

6. トークイベントに参加して印象に残ったこと及びその他の意見や感想

参加者が本トークイベントに参加して印象に残ったことを集約・分類し、【表3】に示した。回答には、「山本選手」、「限界」、「パラリンピック・ムーブメント及びパラリンピック競技大会」、「前向き」に関する事柄が多い傾向が見られた。

また、本トークイベントに対するその他の意見・感想や、今後のイベントで話を聞いてみたいテーマ、アスリート、競技等々を集約・分類し【表4】に示した。回答には、「ゲスト」、「トークイベント」、「今後のリクエスト」に関する事柄が多い傾向が見られた。

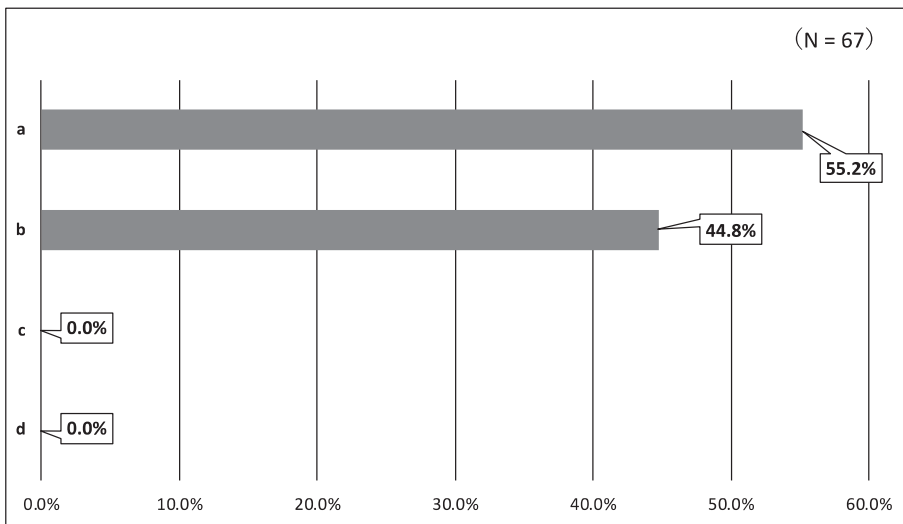
7. 来場者が抱いているオリンピック・パラリンピックに対するイメージ

来場者が本トークイベントに参加する前に抱いていたオリンピック・パラリンピックに対するイメージを集約・分類し、【表5】【表6】に示した。また、本トークイベントに参加した後に、参加者が抱いたパラリンピックに対するイメージを集約・分類し、【表7】に示した。

なお、これらの設問は、今後、国士舘大学と多摩市がオリンピック・パラリンピックムーブメント及びオリンピック・パラリンピック教育に焦点を当てた事業をより活性化させていくために設けた。

【表5】の回答には、「祭典」、「イベント・舞台・大会」、「トップアスリート・代表選手の卓越性」に関する事柄が多い傾向が見られた。また、「商業、興業」、「巨額な費用がかかり、招致に手を上げる都市が少なくなる現状」などといった、今日のオリンピックが抱える課題に関連した回答も見られた。

【表6】の回答には、「障がい」、「トップアスリ



凡例

a: 大いに深まった b: 深まった c: どちらとも言えない d: あまり深まらなかった

図6 パラリンピックに対する理解度の変化

表3 トークイベントに参加して印象に残ったこと

(本人記述のまま)	
山本選手に関すること	
山本さんの話	山本選手の考え方
山本選手の精神力の強さ、カッコ良い！！	山本選手の前向きさ
山本篤さんの力強さに感動しました	山本氏の話にとても感動し、自分に向き合う姿です
山本さん オートバイでの事故とは知らなかった	
アスリートとしてだけではなく、社会の変改に向けて取り組む姿に感動した	
山本さんが落ち込みを1日で回復したこと、すごいなぁと関心	
山本選手「自分でコントロールできること！→最高のパフォーマンス」	
山本篤さんの話を聞いて、自分で自分のやりたいことをするという事	
限界に関すること	
限界はないということをとても感じた	自分で限界を決めつけない
自分に限界を決めなくて挑戦し続けること	自分の限界と他人の評価
限界を決めない	
自分に限界をつくってはいけなし、可能性はたくさんあると思った	
私自身も夢に向かって頑張っていました、いつの間にか自分自身で限界をつくっていたことに気が付きました	
パラリンピック・ムーブメント及びパラリンピック競技大会に関すること	
パラリンピックへの関心	パラリンピアンの方のスポーツに対する情熱
パラリンピックのイメージが良くなった。周りに広めたい	
パラスポーツに対して世界が広がった。三人には共に応援したい	
閉会式の「Impossible」。ものは考え次第だと改めて感じた	
前向き	
前向きに生きること	障がいをもっていても前向きに生きていたこと
健常者である自分ももっとがんばらないといけない	
障がいがあっても、前向きに頑張っている人が多くいることに驚いた。	
今までと体の動きも全然思いどおりにならないのに楽しんで前向きに生きているなと思った	
大けがをしても、前向きになれたきっかけ、前向きに生きている姿	
山本さん、桧山さん、本間さんの生き様 すばらしい 自分もがんばろうと思った	
障がいを負ったからスポーツができないということではなく、人の支えや義足の支えで前を向いてがんばるということ	
その他	
元気を頂きました	大学生がコロナボしているのは良いと思います
声が大変聞きやすい	競技用の義足が高いこと
諦めない心を持つこと	つながりに関する話
「人とのつながりは大切」	人とのつながりが今の人生を豊かにしてくれる
パラアスリートの人生観、思い	スポーツを楽しんでいること
がんばる大切さ	障害をスポーツで乗り越えるパワーには感銘を受ける
力強さ	ケガをしても大きな目標や夢をもっているところ
自分の可能性を信じて挑戦し続けることの大切さ	
チャレンジすることの重要性、成功体験が次につながる (走る)	
自分でできることを探して工夫して考えることが大切だということ	
予想以上の努力と精神力・向上力・明るいことに感激しました	
どんな人でもスポーツができる	

表4 本トークイベントに対するその他の意見や感想

(本人記述のまま)
ゲストに関すること
有名な山本篤さんの話を聞いてよかった
なぜ義足をかくさないのかなどという話なども聞け、感動した
山本選手のパラリンピックへの思い（スポーツへの思いも）を生で聞いてよかった
初めて知った知識がとても多く、特に本間さんは同性なので、特にお話が身に沁みました
山本選手。パラリンピックで最高のパフォーマンスが出来るよう頑張ってください。応援しています。パラリンピックは、もっとメディアで取り上げるべき！！
本トークイベントに関連すること
ただただ感銘をうけました
青柳さんのお話はとても良かった。更にパラに興味があいた
前を向いて。まわりが助けてくれるかどうか。（人とのつながりによる）
よい機会でした。今回の3人のような前向きなマインドの作り方を教えてほしい
山本選手の言葉「心のバリアフリー」自分自身も含めて、日本中に広がると良いなと思いました
スポーツの規模が大きくなった感じ。オリンピックと同じようにパラリンピックにも興味をもった
トークショーを通して生き方を学び、活力を得た。生きる力とは、こういう事であると気づかされた
たいへん貴重な体験ができました。ありがとうございました。（人とのつながり、縁の大切さ、生き方の参考になる）
多摩市の体育館でポッチャを体験しました。参加人数が少なかったのもう少し知れわたるといいなと思いました
もっとパラリンピックについて関わりたいと思ったし、トークショーで自分の生き方について考え直したいと思った
現役で活躍されている選手の話を書いて、自分はどうすべきか、何を考えるべきかを考えなおすきっかけになりました
ケガをしても3人の方が共通して今後の夢をもっていて、可能性のすごさを感じ、やりたいことに一生懸命向き合っていると思いました
3人がそれぞれ大変な状況の中で、前向きにいろいろと進んでおられることに驚き、感動しました。自身をふり返り、もう少し何かがんばらないといけないと反省しました
「関わり」「コミュニケーション」「つながり」人として社会生活をする上で根本的に必要なことを改めて感じました。心のバリアフリーの本当の意味をわかったように思います
何かの第一人者になるのはとても大変だと思いますが、どんな困難でも負わずに自分らしく努力している姿はカッコいいと思いました。パラも直接は見に行きませんが、テレビで見て応援したいと思います
山本選手の想いに感動致しました。市民の方々にも、パラアスリートが色々考え努力してトップアスリートになっていることを伝えられる良い機会だと思います。ありがとうございました。桧山さん、本間さんのような方々が、生活しやすいような社会になるよう私自身も頑張ります
辛い思いをしたからこそ改めて分かることだったり、周りの人の大切さだったり、前向きな気持ちだったり、普段あたり前に過ごしている中であたり前になっている部分の大切さを改めて感じました。自分が楽しいから頑張っていて、それに周りも応援してくれる。やらなきゃいけないをやりたいことにする。すごく素敵なお話だと思いました
今後のリクエスト
アスリートを支える技術スタッフ等の裏方の人の話
アスリートの話はとても楽しいので又企画して欲しいです
多摩市在住？ 松本薫さん（柔道）、畠山愛理さん（新体操）のトークショー
今回のつづきをぜひやってほしいです。半年後、1年後など。
このようなイベントを企画して下さいありがとうございます。できれば継続してやって頂きたいと思います

表5 本トークイベント参加前のオリンピックに対するイメージ

(本人記述のまま)	
祭典	
お祭り	スポーツの祭典
健常者のスポーツの祭典	1番大きなスポーツの祭典
スポーツの祭典で最高のイベント	
全世界の人が注目して、選手もサポーターも1つとなつてとても盛り上がるスポーツの祭典	
イベント・舞台・大会	
世界的に1番大きなイベント	スポーツの頂点。皆が目指している所
4年間の集大成を発表する舞台	4年に一度の特別な世界大会
最も強い人を決める大会	4年に1度という特別な大会
世界のスペシャリスト達が集まる1番大きい試合	
スポーツをやっている人全員が目指すスポーツの中で一番大きな大会	
トップアスリート・代表選手の卓越性	
限られた人が出れる	超人のパフォーマンス
世界の上の選手が争う大会	強豪チームが争う大会
世界中のトップの人たちが競う大会	選ばれた選手が集まる
各国の代表が出れる	トップアスリートの挑戦の場
国代表のアスリートがトップレベルの試合をする	
メダル	
金メダルを取れる種目または好きな種目でなければオリンピックではないと思っていました	
その他	
健常者と障害者との見る目の差があると思います	パラリンピックより有名(メインという感じ)
商業、興行	特に大きな変化はない
健康な人が行っている	健常者
華やか	ゆるやか
メジャー	時々競技場に足を運んでいるので応援してます
オリンピックがメインで、目を向けられているイメージ	自分とのたたかい
スポーツは大好きでいつも普通にみていた	世界一を決める
1964年のオリンピックからずっとオリンピックには関心をもってきたので急にイメージが変わることはない	
巨額の費用がかかり、招致に手を上げる都市が少なくなる現状	
身体能力を極限まで高め、プレッシャーを抑えて、その能力を発揮できる	

ート・代表選手の卓越性」に関する内容が多く見られたことに加え、「あまり知らなかった」、「親しみが無い」など、パラリンピックへの認知の低さが示された。

【表7】の回答には、「祭典・イベント・舞台・大会」、「限界」、「オリンピックと変わらない」に関する事柄が多い傾向が見られた。

表6 本トークイベント参加前のパラリンピックに対するイメージ

(本人記述のまま)	
障がいに関すること	
体に障がいのある人が行っている	障がい者のスポーツの祭典
障害者の方への希望をもたせるイベント	けがにたち向かう選手が集まって競技を行う
障がいのある人たちが出る大会	障がいを負った人たちが輝ける場所
障がいをもっている方	車いすの方の競技
障がいの持った方が出るもの	障がいの方々が争う大会
障害をもっている方々のオリンピック	障がいをもったアスリートのお祭り
障害をもっている人たちで、国の代表たちが競う大会	障害が有ってもスポーツに情熱をもっているアスリートの大会
あまり知らなかった	
あまり知られていない	あまり知らなかった
あまり関心がなかった	親しみが無い
マイナースポーツ	マイナー
マイナーなイメージ	
オリンピックが終わったあとに始まるので、ほとんど見た事ありませんでした	
トップアスリート・代表選手の卓越性	
努力、根性、自己との戦い	自分と世の中への挑戦（戦いではなく）
困難に負け無い。あきらめない	力強い
限界への挑戦	
障害があるのにそれに負けなくらい努力して頑張っているのがすごい	
障害をもっている人が勝負して見ている人たちに感動をあたえる	
その他	
競技	
オリンピックのおまけ	
大変だろう。苦勞が多い。	
よく頑張っているので力をもらいました	
健常者と障害者との見る目の差があると思います	
マイナスでしたがプラスのイメージが強くなった	
国際的に最高のイベントだが、オリが中心のだった	
時々競技場に足を運んでいるので応援してます	
障がいの程度が複雑なため同一レベルの競争が難しい	
オリンピックに目を向けられすぎて、もっと知られてほしいと思っていた	
あまり興味なかったが、この東京パラリンピックは様々な競技を見てみたいと思っている	
これまではあまり意識は低かったが、スポーツ運動の大切さや必要性和パラリンピックの理解が最近深まった	
オリンピックほどではないが、関心を持っていたので、大きな変化なし。他の競技種目にも、目を向けたい！	
特別な人達（障害者でも恵まれた方たち）の大会、一般の障害者の方達とは区別した味方をしていると思います	

表7 本トークイベント参加後のパラリンピックに対するイメージ

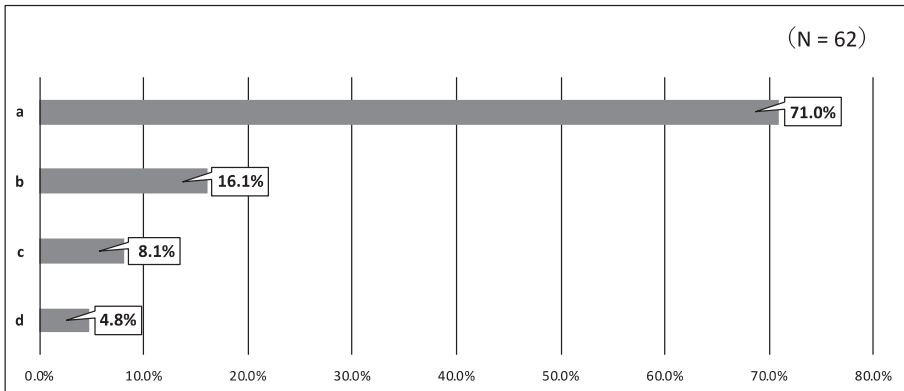
(本人記述のまま)
祭典・イベント・舞台・大会
さまざまな思いを背負っている方々が集まる大会
障がいがあってもできることを最大限に生かして競う大会
自分達がスポーツをしているのと同じように上を目指している
色々な事に悩みながら前向きに生きているアスリートが集る大会
障がいなんて関係なく、動かせる所全てを使って全力でパフォーマンスしている
パラリンピックに出場する難しさ、それ以前の体を動かすまでの大変さを経たの舞台
限界
限界への挑戦
チャレンジする場
自分の限界に挑戦できる場所
自分で限界をきめない人達の素晴らしいイベント
障害を負ってまでも自分の限界に挑戦するすごいこと
パラリンピックに出る方々は、自分の限界を決めずやっている
ひとりひとりの人生があり、努力の成果を真剣に応援したい。(限界へのチャレンジを尊敬し)
ただ障害者が参加するオリンピックだと思っていましたが、障害を持ってしまっても絶対に諦めないで挑戦した人しか出場できない、オリンピックよりもすごい大会だと感じました
オリンピックと変わらない
オリンピック選手に負けない
オリンピックと何も変わらないと思った
オリンピックと何ら変わりのないスポーツで頂点を決める
パラリンピックもオリンピックと同じくらい選手が人生をかけている場
オリンピックと変わらず選手が1人1人全力で勝ちにいている。かっこいい
その他
『感謝』
わかりやすい
観戦したいスポーツ
応援したいと思いました
障害を持っている人のすごさ
努力の元にあるんだと思う
自分の出来ることを精一杯行う
スポーツ、アスリート、楽しさ
装着用具の重要性がより分かった
障害者スポーツの枠を超えている
たくさんの方々の努力のおかげで成り立っている
自分のケガに向きあう人々ががんばっている
もっとパラリンピックに関心を持ってほしい
だれもがチャレンジできる社会の構築が必要と感じた
明るい・楽しい・やってよかったという気持ちの充実
障がいを持った持たない関係なく努力しつづけることの大切さ
心の強い方でないし更に上はめざせない。障害者は本当に強い
人とのつながりが人生を豊かにしてくれる!!貴重な話が聞けた
オリンピックの劣化版ではなく、まったく新しいジャンルのスポーツ
競技場に足を運んでいますが、もっと多くの人が応援に来てほしいと何時も思ってます
障害者の方々の常日頃の努力したことによってアスリートになった。その生き方がすばらしい
1人1人が特別な思いをもってののだと思いました。少しでも協力できることがあればしていきたいです
マイナーなイメージがあったけど、実際に動画と話を聞いてパラリンピックをもっと知りたいと思いました
家族に障害を持つ人ができて、はじめて色々と考えさせられました。パラリンピック、もっと見ようと思います
パラアスリートもいち社会人であり仕事がある。あらゆる人が共生できる社会を実現してくれるスポーツだと思う
きっと参加する選手の1人1人が様々なことを真剣に考え、障害をもちながら自分の可能性を追求しているんだと思った
障害で平等でなくなるのではなく、一人一人が前向きに生き、どうカバーできるのか努力して積み上げてできる大会だというイメージになった
より興味をもちました。障がいは大変なことだとは思いますが「かわいそう」とか「健常者とちがう」という理由で差別してはいけないと思います
障がいや悔やむ、というより、障がいがあるからこそ伝えられるもの、できることをとても前向きに考えていて、考え方が前向きで明るいものになった
健常者のアスリートはその身体、心のトレーニングが主に比べ、パラは自分だけではなく社会の理解、ありかたなど広い視野も求められると思いました

8. パラリンピックの理念や歴史、オリンピック・パラリンピックムーブメントなどに関する知識の習得状況及び時期と内容など

来場者のパラリンピックの理念や歴史、オリンピック・パラリンピックムーブメントなどに関する知識の習得状況についての回答で最も多かったのは、「ない」であり、71.0%を占めた。その次に多かったのは、「学校で学んだ・聞いた」で16.1%であった【図7】。

また、学校でオリンピック・パラリンピックに関する知識の習得状況についての回答で最も多かったのは、「ない」であり、71.0%を占めた。その次に多かったのは、「学校で学んだ・聞いた」で16.1%であった【図7】。

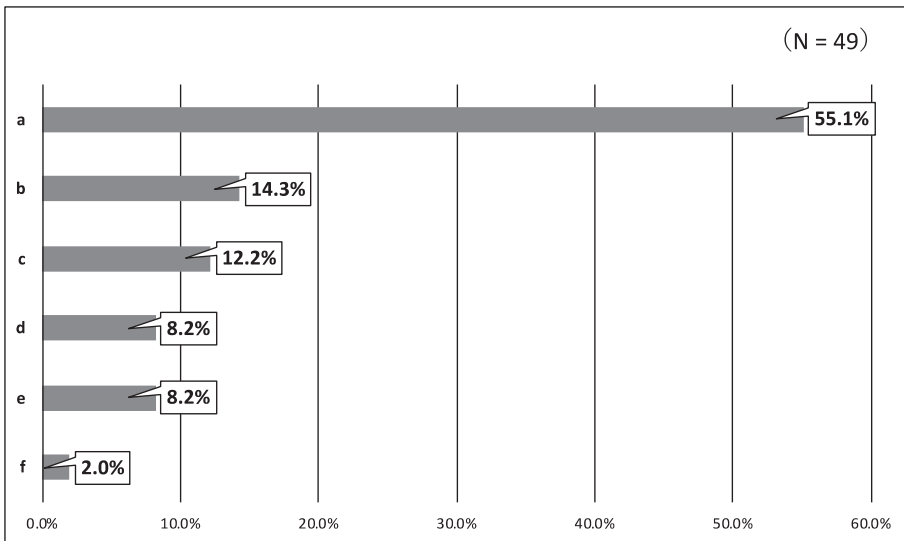
また、学校でオリンピック・パラリンピックに



凡例

a: ない b: 学校で学んだ・聞いた c: その他 d: 家族から学んだ・聞いた

図7 パラリンピックの理念や歴史、オリンピック・パラリンピックムーブメントなどに関する知識の習得状況



凡例

a: 学習したことはない b: 高校生 c: 大学生 d: 中学生
e: 1964年当時、小・中・高・大学生であった f: 小学生

図8 オリンピック・パラリンピックについて学習した時期

ついて「学習したことはない」という回答は55.1%で半数以上を占めた。学習した時期で最も多かったのは、「高校」の14.3%であった【図8】。

学校での具体的な学習内容については、1964年または2020年に学校時代を過ごした参加者より回答を得ることができた【表8】。この結果は、日本におけるオリンピック・パラリンピックに関連した学習が、大会の自国開催を契機に展開されてきたことに起因すると考えられる。学習内容としては、1964年当時では、オリンピックをテレビ観戦したことやパラリンピックが学習されていなかったことが確認できた。それに対して2020年には、オリンピック・パラリンピックの歴史や、自らの参画方法（ボランティア）を学習したこと

が確認できた。パラリンピックが学習に取り入れられ、競技種目の体験学習なども行われていることは、パラリンピックが学習内容に含まれていなかった1964年と比較して大きく変化した点である。

9. 「聖火リレー」について聞いてみたいこと

参加者が「聖火リレー」について聞いてみたいことを集約・分類し、【表9】に示した。なお、この設問は、今後、国土舘大学と多摩市がオリンピック・パラリンピックムーブメント及びオリンピック・パラリンピック教育に焦点を当てた連携事業をより活性化させていくために設定した。回答は、聖火リレーの歴史や意義、東京2020大会を契機とした聖火リレーの現状に関する内容であった。

表8 オリンピック・パラリンピックに関する学習時期と内容

自由記述欄に寄せられた回答（本人記述のまま）			
現在（2019）の年代	学習した当時	1964年当時	内容
70代	記載なし		テレビで日本でのパラリンピックを進めた人（医者）の話を知った
60代	中学生	○	昔のことで、あまり記憶はないですが、東京オリンピック時中学生で、TVをよくみた思い出があります
60代	記載なし	○	体育教員として生徒に教えています。生徒にどう教えていかヒントをたくさんもらった気分です
50代	記載なし	○	小学生前でした パラリンピックは知っていたが学習対象になったことがありません
20代	大学生		戦時中、東京オリンピックを開催する予定だったが中止になった。 その後、戦争の傷をいやす為にもスポーツが発展し、その後オリンピックを開催することができた
20代	大学生		パラリンピックのバラは権損からきてる
20代	大学生		国旗の色の意味
20代	記載なし		戦争でケガをした戦士のリハビリがパラリンピックの始まりだということ
10代	大学生		体育史の授業で歴史を学んだ
10代	高校生		自分たちが学生としてパラリンピックをどう広められるか
10代	高校生		歴史など
10代	中学生		ポッチャなどを体験した。
10代	小学生		パラリンピックの選手が実際に小学校に来て頂き、競技紹介や、メダルを見せてもらったり、さわらしてもらったりした（特別授業）

表9 「聖火リレー」について聞いてみたいこと

（本人記述のまま）	
聖火リレーがなぜ開始されたのか	聖火リレーの意義や走路がどのように決定したのか
聖火の歴史	火の意味、起源など
多摩市の応募倍率、選考基準を知りたいです	聖火トーチのデザインはどのように制作されてるのか
一人一人がどのような思いでつないできたか、聞いてみたい	時間的にタイミングが合えば、参加したいと思います

Ⅶ. ま と め

本研究の目的は、国士舘大学と多摩市が大会組織委員会公認プログラムとして主催したトークイベントを対象に、その成果と課題を明らかにすることであった。本項では、本トークイベントの目的に照らして、参加者へのアンケート調査の結果から、トークイベントの成果と課題をまとめる。本トークイベントの目的は、次の4点であった。1) 幅広い世代に対する東京2020大会に向けた気運醸成 2) 「障がい者がスポーツを楽しめる環境づくり」を多摩市内において促進するための一助となるようにすること 3) 障がい者や障がい者スポーツ、パラリンピック・ムーブメントに関する参加者の認識の深化 4) 自らの生き方に関する参加者の認識の深化

1. 幅広い世代に対する東京2020大会に向けた気運醸成

本トークイベントは参加者の100%から「大変満足できた」または「満足できた」とする回答を得たことから、気運醸成に大きな成果があったと見ることができる。また、参加者は、若年者から高齢者まで偏ることなく、幅広い世代からの参加を得ることができた。

なお、今回参加が少なかった30代の子育て世代に向けた啓発活動については、親子が活動している団体・イベントとの連携及び参加しやすい会場・時間での企画など、対象に見合ったプログラムを考えていくことが今後の課題である。

2. 「障がい者がスポーツを楽しめる環境づくり」を多摩市内において促進するための一助となるようにすること

本トークイベントは「障がい者がスポーツを楽しめる環境づくり」を促進していく上で前提となる次の2点に積極的にアプローチすることができたと考えられる。すなわち、(1) インクルーシブ(包摂的)な社会の創出 及び (2) 障がい者との

自然且つ積極的な関与である。

本トークイベントの導入では、パラリンピック・ムーブメントがインクルーシブ(包摂的)な社会の創出を目指していることが紹介され、会場に集った一人ひとりが、2020年に向けて、また2020年をきっかけにどのように過ごすことができるかという問いかけがなされた。第1部のトークでは、世の中がオープンマインドになっていくよう、山本選手自らが日頃から意識・行動していることや、東京2020大会を契機に日本に如何なるレガシーを遺せるかが重要となることがメッセージとして発信された。第2部では、健常者による、障がい者への自然且つ積極的な対話・コミュニケーションの必要性が大きく取り上げられた。

これらの事柄に対して、参加者に新たな気づきが生じ、これまでの認識・理解が深化したことを読み取ることができた。

3. 障がい者や障がい者スポーツ、パラリンピック・ムーブメントに関する参加者の認識の深化

アンケートに回答したすべての参加者から、本トークイベントに参加したことでパラリンピックに関する理解度が「大いに深まった」または「深まった」とする回答が得られた。トークイベントに参加して印象に残ったこととしては、「山本選手」、「限界」、「パラリンピック・ムーブメント及びパラリンピック競技大会」、「前向き」に関する事柄が多い傾向が見られた。

また、本トークイベントの前には、パラリンピックを「あまり知らなかった」という回答が多かったが、イベント後には、パラリンピックを「オリンピックと変わらない」と認識した回答が多く見られた。こうした回答からは、障がい者や障がい者スポーツ、パラリンピック・ムーブメントに対する参加者の認識の変化を確認することができた。

4. 自らの生き方に関する参加者の認識の深化

アンケート調査の結果より、自らの生き方に関

する参加者の認識の変化が読み取れる回答を多数得ることができた。それらの内容は、1) 参加者一人の生き方に関する内容 2) 社会を構成する一員としての生き方に関する内容の2点に大別することができた。

1) については、ゲストの言葉から生き方を学び活力を得たり、パラリンピックへの積極的な関与への意欲、自分に限界を決めないで挑戦し続けることの大切さ、たくさんの可能性への気づき、自分への鼓舞などを表明する感想がみられた。

2) については、障がいのある人々が、生活しやすいような社会になるよう自分自身も頑張る、心のバリアフリーが日本中に広がることへの願い、ゲストへの共感と少しでも協力できることがあればしていきたいといった感想がみられた。

本トークイベントは、パラリンピックにおける競技的な側面に加え、その本質的な目的であるパラリンピック・ムーブメントに焦点を当て、ゲストと会場の参加者が一体となって、パラリンピックの開催を契機に期待される社会のあり方や一人ひとりの生き方などについて考えを深めることをねらいとして企画された。その結果、参加者からはパラリンピックへの関心の高まりに加え、今後の具体的な行動意欲や希望を確認することができた。このことから、本トークイベントは、多摩市及び国士舘大学が掲げたイベントの目的に大きく寄与することができ、十分な成果を得ることができたと考えられる。また、特に大きな課題は見られなかった。

本トークイベントを通して、同じ地域にある自治体と大学が連携して、オリンピック・パラリンピック及びスポーツを通じた諸活動を展開する取り組みを企画し、幅広い世代の市民を対象に提供していくことは意義深いことであると再確認することができた。

なお、本トークイベントは、新型コロナウイルス感染症の発生以前に開催されたものであった。そのため、今後イベントを開催するにあたっては、

様々な感染予防対策を講じた上で運営していくことが求められるであろう。

謝辞

アンケート調査の実施にあたり、調査実施後のデータ入力については小俣夏乃氏、竹下将輝氏（国士舘大学大学院修士課程）の献身的な協力をいただきました。記して感謝の意を評します。

注

- 1) 東京2020大会参画プログラムとは、東京2020大会の大会ビジョンのもと、スポーツだけでなく、文化芸術や地域での世代を越えた活動、被災地への支援など、参加者自らが体験・行動し、未来につながるプログラムである。大会組織委員会の認証を受けた組織・団体は、東京2020公認マークや「オリンピック・パラリンピック」等の文言などを使用することができる。なお、大会組織委員会は、プログラムのテーマとして次の8つを示している。1) スポーツ・健康（楽しく体を動かそう） 2) 街づくり（みんなに優しい都市に） 3) 持続可能性（未来につなげよう） 4) 文化（新しい日本を発見） 5) 教育（新たな自分を見つけよう） 6) 経済・テクノロジー（日本の最先端の技術を発信） 7) 復興（今こそ絆を深めよう） 8) オールジャパン世界への発信（みんなの想いを一つに！）⁶⁾
- 2) 体育学研究領域における国内最大の学術研究団体である日本体育学会は、2015年に「東京オリンピック・パラリンピックと大学連携」と題するシンポジウムを開催した。そこでは、東京2020大会開催決定を機に、「体育・スポーツへの無関心やそれらに関わる偏った知識から脱却し、オリンピック・パラリンピックや体育・スポーツに関する知識がその専門研究機関・教育機関だけでなく、一般教養、一般体育にわたる横断的な知識の定着につながること」が目指されて議論が展開された³⁾。

引用・参考文献

- 1) 国士舘オリンピック・パラリンピック特設サイト「多摩市との連携協定」. TOP, 自治体等との連携. <https://www.kokushikan.ac.jp/tokyo2020/cooperation.html>. (2021年2月6日参照)
- 2) 増本達哉, 青柳秀幸, 田原淳子 (2020) 「2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機とした大学と地方公共団体における連携事業の成果と課題—自転車競技ロードレースに着目した

トークイベントを事例として一」]. 体育・スポーツ科学研究, 第20号、PP.1-22. 国士舘大学体育・スポーツ科学学会発行.

- 3) 來田享子, 重城哲 (2015) 「組織委員会の大学連携事業とオリンピック・パラリンピック教育プログラム (東京オリンピック・パラリンピックと大学連携, シンポジウム, 共催企画, 2020東京オリンピック・パラリンピックと体育・スポーツ科学研究)」。日本体育学会大会予稿集, P.13.
- 4) 多摩市ホームページ「多摩市と国士舘大学との東京2020オリンピック・パラリンピックに向けた取組に関する連携協定」。トップ, 子育て・教育・健康・福祉, スポーツ・生涯学習・文化, オリンピック・パラリンピック. <http://www.city.tama.lg.jp/0000001905.html>. (2021年2月6日参照)
- 5) 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会ホームページ「東京2020参画プログラム」。ホーム. <https://participation.tokyo2020.jp/jp/>. (2021年2月6日参照)
- 6) 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会ホームページ「東京2020参画プログラムとは」。ホーム, 参画プログラムとは. <https://participation.tokyo2020.jp/jp/about/>. (2021年2月6日参照)
- 7) 児童育成協会 (2020) 「子育て中の親の外出等に関するアンケート調査【結果サマリー】」。 <https://www.kodomono-shiro.or.jp/cms/wp-content/uploads/2020/04/research2019.pdf>. (2021年2月6日参照)

東京2020パラリンピック開催まで、いよいよあと1年となりました。
パラリンピックをより身近に感じられるように、
パラ陸上界の第一線でご活躍中の山本篤選手をお招きし、
「トークイベント」を開催します。

～東京2020パラリンピック開催まであと1年!～
トークイベント in TAMA “夢への挑戦”

パラリンピアンから学ぶ、 限界への挑戦

令和元年9月29日(日)
14:00～16:00 開場13:30

多摩市立関戸公民館グイータホール(多目的ホール)
多摩市関戸4-72 グイータ・コミュニネ8階
京王線 聖蹟桜ヶ丘駅(西口) から徒歩1分
定員200名(事前申込制・入場無料)
手話通訳・要約筆記あり

第1部…講演 **山本 篤氏**
第2部…クロストーク **山本 篤氏**
桧山 和真氏
(国士館大学大学院修了)
本間 未来氏
(国士館大学4年)

司会兼コーディネーター **田口 康之氏**
(国士館大学教授)

ゲストアスリート
山本 篤氏
男子走り幅跳びF63 WPA世界ランキング1位(2019年6月25日現在)
プロ陸上選手(2017年10月～)
リオ2016パラリンピック陸上競技 男子走り幅跳びF42 銀メダリスト

お問い合わせ 多摩市くらしと文化部
オリンピック・パラリンピック推進室
TEL：042-338-6947(平日午前9時～午後5時)

トークイベントの
申し込み方法は裏面へ

本事業は、「多摩市と国士館大学との東京2020オリンピック・パラリンピックに向けた取組に関する連携協定」に基づき実施するものです。
主催 多摩市、学校法人国士館

ゲストアスリート・第2部登壇者プロフィール



【ゲストアスリート】

山本 篤 [やまもと あつし]

新日本住設株式会社所属

男子走り幅跳び T63 WPA 世界ランキング 1 位 (2019年6月25日現在)

リオ2016パラリンピック陸上競技 男子走り幅跳び T42 銀メダリスト

1982年生まれ/静岡県出身

小学校では野球チームに入り、中学、高校ではバレー部に所属。高校2年の春休みに起こしたバイク事故により、左足の大腿部を切断。高校卒業後に進学した義肢装具士になるための専門学校で競技用義足に出会い、陸上を始める。本格的に競技をしようと、2004年に大阪体育大学体育学部に入學し、陸上部に所属した。2008年スズキ株式会社に入社。北京2008パラリンピックから3大会連続出場。2016年5月には当時の世界記録を更新。北京2008パラリンピックでは、走り幅跳びで銀メダルを獲得。リオでは走り幅跳びで銀メダル、4×100mリレーで銅メダルを獲得。東京2020パラリンピックで金メダルを目指し、2017年10月にはプロ陸上選手となる。2019年5月、自身が持つ日本記録を3年ぶりに更新(6m70cm)。



【第2部登壇者】

松山 和真 [ひやま かずま]

国立館大学体育学部卒業

国立館大学大学院修士課程修了

1991年生まれ/茨城県出身

幼少期より体操に親しみ、小学生時代より全国クラスで入賞・活躍する。2010年、練習中の事故により、頸椎損傷となる。リハビリを経て大学に復学、また大学院へ進学し、男子体操選手の筋の収縮特性をテーマに研究を遂行しつつ、男子体操競技部の活動にも協力した。現在は、社会人生活1年目を送ると同時にパラアスリートに取り組んでいる。

主な成績

2006年：全国中学校体操競技選手権大会優勝
 2008年：全国高等学校総合体育大会跳馬2位、全日本ジュニア
 ゆか優勝・全日本種目別選手権跳馬4位
 2009年：全国高等学校総合体育大会及び全日本ジュニア跳馬3位
 2006年・2008年・2009年：ジュニアナショナル強化指定選手



【第2部登壇者】

本間 未来 [ほんま みく]

国立館大学体育学部4年

1997年生まれ/神奈川県出身

3つ上の兄の影響で3歳から体操を始めた。2017年、夏の大会中の事故により頸椎損傷となる。現在はリハビリをしながら大学に通い、保健・体育の教師になることを目指している。また、車椅子ラグビーやツインバスケ、ボッチャなどのバラスポーツに取り組んでいる。

主な成績

2011年：国民体育大会体操競技8位入賞
 2013年：全国高等学校総合体育大会体操競技団体5位
 2013・2014・2015・2016・2017年：全日本体操競技種目別選手権大会跳馬出場(2015年時は4位入賞など)

トークイベントのお申し込み方法

お申し込みは往復はがきで郵送、または電子申請のどちらかより、お申し込みいただけます。

申込期間：令和元年8月5日(月)～9月13日(金) 消印有効

下記①～⑥の必要事項を記入の上、往復はがき(1人1枚)を下記宛先まで郵送してください。

①住所 ②氏名 ③年齢 ④電話番号 ⑤車いす席の利用の有無 ⑥介助者の有無(1人まで、介助者がいる場合は要氏名)

宛先 〒206-0011 多摩市関戸4-72 ヴィータ・コミュニエ7階 多摩市オリンピック・パラリンピック推進室

または

申込期間：令和元年8月5日(月)0:00～9月13日(金)23:59

下記URLまたは右記QRコードより必要事項を入力の上、申請してください。



<http://www.city.tama.lg.jp/0000009268.html>

応募者多数の場合は「抽選」となります。応募結果は、9月20日(金)頃までに申込者へ返信はがきで郵送またはメールでご連絡します。

～東京 2020 パラリンピック 開催まであと1年！～

トークイベント in TAMA “夢への挑戦” -パラリンピアンから学ぶ、限界への跳躍-
アンケート

*ご来場くださりありがとうございます。本アンケートによるご回答は、多摩市における今後のイベントの企画と、オリンピック・パラリンピックムーブメントの普及・推進に関する国士舘大学の研究に活用させていただきます。お手数をおかけいたしますが、ご回答のほどよろしくお願いいたします。

以下、1～13までの質問へご回答(1・7・8・9・11・12・13は記入、それ以外は該当箇所に)ください。

1. 性別

2. 年代

10歳未満 10代 20代 30代 40代 50代 60代 70代 80代以上

3. 本トークイベントを何でお知りになりましたか? ※複数回答可

たま広報 多摩市公式ホームページ 回覧板チラシ 公共施設の置きチラシ
タウン紙(ミニコミ紙) ポスター インターネット 友人や知人等から聞いた
その他()

4. 本トークイベントに参加したいと思われた理由は何ですか? ※複数回答可

ゲストアスリートに興味があった スポーツに興味があった
オリンピックに興味があった パラリンピックに興味があった
その他()

5. 本トークイベントの満足度

大変満足できた 満足できた どちらとも言えない あまり満足できなかった
その理由()

6. パラリンピックに関する理解は深まりましたか?

大いに深まった 深まった どちらとも言えない あまり深まらなかった
その理由()

7. 本トークイベントに参加して、印象に残ったことは何ですか?

()

8. 今回のイベントに参加するまで、あなたは「オリンピック」・「パラリンピック」について
どのようなイメージをもっていましたか?

これまでのオリンピックのイメージ:

これまでのパラリンピックのイメージ:

※裏面もあります。

9. 今回のイベントに参加して、「パラリンピック」についてどのようなイメージをもちましたか？

今回のイベントに参加したあとのパラリンピックのイメージ：

10. パラリンピックの理念や歴史、オリンピック・パラリンピックムーブメント、グットマン医師（パラリンピックの創始者）について、どこかで学んだり聞いたことはありますか？

学校で学んだ・聞いた 家族から学んだ・聞いた ない その他（ ）

11. 学校でオリンピック・パラリンピックについて学習したことがあれば、その内容をご記入ください。

※また、1964年東京大会当時、学生であった方はその欄にもチェックを入れてください。

学習した時、 小学生 中学生 高校生 大学生 であった。 学習したことはない

※ 1964年東京大会当時、小・中・高・大学生であった。

12. 多摩市と国士舘大学は、来年3月21日（土）に、「聖火リレー」をテーマにしたトークイベントの開催を検討しています。「聖火リレー」について聞いてみたいことがございましたらご記入ください。

13. その他、何かご意見・ご感想がございましたらお聞かせください。

※本トークイベントの感想、今後のイベント（講演会・トークショーなど）で話を聞いてみたいテーマ、アスリート、競技等々

ご回答・ご協力くださりありがとうございました。